「施設」ではない高齢期の「住まい」とは

～「高齢期の住まい研究」報告会～

グループリビングえんの森

“NPO 法人暮らしネットえん”は、地域に住む、病気や障がいによって生活に困難を抱えている人やお年寄りに必要な支援提供する「福祉実践者」であり、身近な地域で良質な文化活動を提供・提案する「デザイナー」であり、福祉現場の実態やより良い社会の在り方を発信するための調査研究を行う「研究者」でもある。今回はその中でも「研究者」としての“えん”の活動を報告したい。

去る３月４日に“グループリビングえんの森”にて、『高齢者グループリビングの社会的普及に向けた実践的調査研究』（ＪＫＡ補助事業）の報告会が開催された。この調査研究は、高齢になり身体状況が変化したときに「施設」と呼ばれる場所に入居することを前提とするのではなく、住み慣れた地域で仲間とのつながりを緩やかに継続しながら、生きがいを持って暮らせる場を社会に増やすことを大きな目標にしている。そして、その暮らしの場としてグループリビングという住まいの在り方に着目をし、全国で小規模な単位で集まって暮らす場を提供している事業所の実態を調査し、良質な汎用性のあるモデルを社会に向けて提示することを目的としている。今年度は、大学教授や研究者とともに、代表小島と林（ＧＨえん職員。立教大学コミュニティ福祉学部博士課程在籍）が委員会のメンバーとして共同調査に関わっている。

報告会当日、木の香り漂う“えんの森”には、グループリビングの運営者や居住者、そして行政関係者、研究者、など 42 名が集まった。調査対象となった 11 事例は、運営者の思いや建物や空間のデザイン、利用料など、それぞれが独自のスタイルを持ったものであるが、そのどれもが「魅力的」であると感じられた。しかし、そうした「魅力的」な住まいの場はそれほど多くないことも事実である。誰もが選択できるようにするにはどうすればよいか、継続して調査し分析する必要がある。この調査は３年計画で実施する予定であり、今年度はその１年目だ。来年度は対象事例を増やして調査をするとともに、いくつかのモデルを提示することを目指している。今後も「研究者」としての“えん”の発信に注目していただければと思う。

（グループホームえん／林　和秀）

※調査報告書が完成しました。必要な方は、暮らしネット・えんまでお問い合わせ下さい。